ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「ルカリオ、白はどこ？」

(聞くまでもないだろう……)

　ボールから出てきたルカリオが、溜息混じりにそう言った。どういうわけか、ルカリオは夜になると波導を感知する力が鈍るのだ。普通のルカリオなら、こんな事にはならない。あくまで彼のルカリオだけが持つ制約だった。

　とは言っても、『感知する力』が鈍るだけで、普通に『波動弾』を撃ったりする分には問題は無いので、彼等は然程気にしてはいないのだが。

　しかし、そこら辺の事情を分かっているはずの雅也が思わず聞いてしまう程に、今の彼は焦っていた。

(取り敢えず、先に進もう。もしかすると、白や来夢音と合流出来るかもしれない)

「そ……そうだね」

　そう言って、一人と一匹は歩き出す。さっきの白とは違い、それなりに会話はあるものの、それでも彼等はどこか居心地の悪さを感じていた。

　理由は分かっている。昨日の事だ。

　ポケモントレーナーとして、雅也は自身のポケモンを死に直面するレベルの危険な目に遭わせてしまった事に責任を感じていないわけでは無かった。ただそれに対し、きちんと謝る事がはたして自分のポケモンに対する礼儀として正しい事なのか、彼はイマイチ自信を持つことが出来ないでいる。

　そして、そのポケモンを代表としてルカリオから言わせてもらえば、別に主人の口から謝罪の言葉を聞きたいと思っているわけではない。ただ、だからと言って、聞きたい言葉が何も無いわけじゃ無かった。しかし、それがどんな言葉なのか、ルカリオや他のポケモン自身にも分からない。

　ぎこちない会話が続く中、

(雅也、一ついいか？)

　ルカリオのその一言が、嫌な空気を少しだけ破った。

(何故あの時、私を出した？)

　『あの時』というのは、ジャックの最後の攻撃を放った時の事だろう。

　そう聞かれ、雅也は頭をかく。

　答え辛い質問なのは事実だった。だが、同時に、話しやすい話題だと感じた事も事実だ。

「ごめん。分かんない……かな？」

　少し考えたものの、雅也は思ったことを正直に答えた。

「なんでルカリオを出したのか、僕にも分からないんだ。手が勝手に動いたっていうか……」

(そ……そうか……)

「それより、どうやってあの攻撃を防いだのか、僕はそっちの方が気になるかな？　ルカリオ、どうやったの？」

　細かい所は思い出せないが、それでもルカリオの『波動弾』があの攻撃に命中し、爆発させたこと位は記憶に残っていた雅也は、首を傾げた。あの時のルカリオでは、どうひっくり返ってもあれを防げるだけの力は無かったはずだ。

　ルカリオは少しの間、顎に手を当てて目を閉じていたが、やがてゆっくりと首を横に振る。

(分からん。俺が知りたいくらいだ)

「そう……」

(それより、白と来夢音を探しに行かないか？　いつまでもここで立ち止まっているわけにも行かないだろう)

「……そうだね。でも、本当にどこに行ったんだろう、二人共」

　歩きながら、雅也とルカリオは辺りを見渡す。一面、木々が生い茂っていた。人の気配はおろか、野生のポケモンすらいないようだ。

「全く……本当に、来夢音も白もどこに行ったんだっ？」

　雅也が軽くヒステリックになった、その時だった。

「えっ？　私がどうかしたの？」

　雅也達が飛び上がらんばかりに驚いたのも無理は無い。慌てて振り向くと、そこには来夢音の姿が。昼間と同じジャージ……かと思ったら、少しデザインが違ったことに気づいたものの、それでもそんな格好で、ポカンと口を半開きにして突っ立っていた。彼女も彼女で、雅也達の驚き様に驚いたらしい。

　顔やジャージには所々泥が付いているが、どうやら怪我とかは無いようだった。

「来夢音！　探したんだよっ？」

「どゆこと？」

　可愛らしく首を傾げる来夢音に、雅也は今までの経緯を説明する。

　だが、白とはぐれたことを伝えた時だった。

「えっ、ちょっ……！」

「どこっ？」

　今まで『てへっ、やっちゃった☆』みたいな顔で話を聞いていた来夢音が、血相を変えて雅也にグイっと詰め寄ってきた。今、来夢音の手は雅也の肩を掴んでいる。力の入り方が女子とは思えない程入っていて、雅也は思わず身を震わせた。

「どこで、白とはぐれたのっ？」

「え……えっと、向こ――って、来夢音っ？」

　自分が今来た道の方を指差すや否や、来夢音は肩から手を離して走り出す。慌てて雅也も後を追った。走る姿に、どこかデジャヴを感じた彼だったが、まるで来夢音を探しに行くのに部屋を飛び出した時の白と同じだということに気が付く。

　いつも一緒にいるからか、こういう所は似ているんだなぁ、と、少し可笑しくなった雅也は、こんな状況だというのにクスリと笑ってしまった。